

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語哲学

——言語理解と言語社会——

梶 嘉 一 郎

一

人間が言語によって特徴づけられる存在であるという見解は、もちろんフンボルトによってあたりしく生れたものではない。すでに古くから、人間は動物と天使の間にまたがる存在として、動物は言語を欠くがゆえに天使は言語を必要としないがゆえに、右の見解は当然のこととして認められてきたのであった。しかしさらにこのことに関してフンボルトによって決定的になったことは、すでにさきに示唆したように、『同志社外国文学研究』第四号掲載）人間が言語を所有するということの人間学的な解釈である。換言すれば、第一に人間が言語によって思考することの、第二に人間が言語によって意志を表明することの意義である。前者についてはすでにさきに考察した（前掲書参照）ので、この小論では後者について述べることにする。

人間が言語によって意志を表明するというとき、特殊の場合（独りごと）を除いては、そのことによって必然的に他

者を前提し措定するはずである。表現せられた言語は、まづ自己を他者にかかわらせようとする一つの試みと解することができる。この試みによって、表現せられた内容の理解を他者に求めようとするのである。この場合あるいは逆に、他者を理解しようと努力することもあれば、また相互に理解を求めることによって、自他ともに共通の理解に達することも可能である。いづれにしても人間は、人間の存在にとって決定的な構成要素である言語によって、互いに汝に対して自己を開示し、その理解を求めようとするのであり、いわば言語は自他の理解作用にとっての決定的な要素なのである。自己と他者とはこのような言語によって理解され、結合され、そこにまた友情をはじめその他の深くて高貴な、全人間を引き立たせる一切の感情も生じるのである。もとより言語による表現のみが相互理解の唯一の手段ではない。ドイツタイもいうごとく、身振り手振りをはじめあらゆる行為もまた理解の一手段であり、あるいはさらに体験の表現としての芸術作品もまた理解の媒介をなすものである⁽¹⁾。しかしながらそうした理解にさきだち、そうした理解を可能ならしめる前提は、やはりほかならぬ人間の言語なのである。

右のように我と汝とは、言語による理解によってはじめて結合されるのであるが、その際当然のことながら、理解はつねに共通の言語を必要とするものである。なぜなら、それによってはじめて語り合う両者の間に、精神的な共鳴が生じるからであり、もし両者の間に共通の言語がないときには、いつまでも精神のない共存がつづくだけであり、そこではたとえば前述の身振り・手振りといった非常手段に訴えるほかはないということになるのである。さらに両者がよりよき理解に達せんがためには、そうした共通の言語を包括する、いわば民族言語の中において、ともに生活することであろう。というのは、われわれが他者に語りかけるといふことは、前述のように他者である汝にかかわることであるとともに、また何らかの事物に対する自己の発言を意味することであり、いわば我と汝との間に介在する

中間世界や環境に対する相互のかかわりを表現するものでもある。したがって完全なる理解は、そうした中間世界や環境を両者がともに所有するところに生じるのであり、このことを逆にいえば、われわれが他者に語りかけうる可能性というものは、まさしく両者が共通的にあるところの言語地平 Sprachhorizont によって制約されてあるということである。

ところで、他者を理解するということは、逆にまた他者を誤解するという可能性をも包含することであろう。フンボルトもまた「すべての理解はつねに同時に誤解でもあり、思考と感情との一切の一致は相互進行的である⁽²⁾」と語っている。すべての理解はつねに同時に誤解でもあるという、一見反語的なフンボルトのこの言葉は、いったい何を意味するのであろうか。これを端的にいえば、われわれの真の理解は思考と感情とが一致することによって成就するのであり、しかもそれは一挙になされるものではなく、理解・誤解の段階をくりかえしつつ漸次完成するものなのである。ではなぜ理解はこのように流動的で漸進的な経過をたどらねばならないのであろうか。それは一つには、言語を使用するわれわれの人間存在そのものの在り方に起因するのであり、一つには、言語が持つ特性にあるといえるし、さらには真の理解がたんなる言語の理解につきるものでないことによるのである。すでにデイルタイやジンメル⁽³⁾が示唆したように、われわれは言語によって思考し感じる存在でありながら、一方でまたそれからはみ出る存在でもあるがゆえに、自他の間にとり交わされる会話における言語という、いわばたんなる器官 Organ によっては、互いに一挙には完全な理解には達しえないのである。他方また右のことと結論的には同じことを意味することになるが、言語もまた前述のように人間相互の理解を可能ならしめる前提でありながら、生の日常的要求に類いする言語を除いては、一つ概念をもってその包含する完全な意味内容を、自他の両者に同じような仕方では把握されえないという

性格を持つものである。このように言語による相互理解の不完全性を語るとき、そのような言語を使用するわれわれにとっては、究極的に汝そのものはもちろん、汝の言葉さえも真の意味で理解不可能なのであるか。この点についてフンボルトはどのように解しているのであろうか。

ごく単純に考察しても、個人から発せられる言語は、自我の純粹性と主観性とを意味する表現であらうし、そのかぎり言語は個人と個人との間を媒介することは不可能である。しかし以前から繰り返し述べるように、フンボルトによれば、人間の個性はただ自己の中に完結し、自己の孤独性に凝りかたまってしまふような求心的な面だけを所有するのではない。人間はむしろただちにしかも必然的に、人間性の一般的な本質へと参加する遠心的な面をも所有するものである。そこで彼はつぎのようにいう。「あらゆる個人は、人間性の全体を、ただその個々の発展の軌道の中のみ荷っているのである」⁽⁴⁾と。すなわち個性とは、あらゆる個性に共通して一貫するところの人間の本性の、その程度の刻印にほかならないのであり、逆に全体としての人間の本性とは、その部分としての個性においてのみ、自己を表現しうるものなのである。このことからしてフンボルトは、言語と個性と理解についてつぎのように語るのである。「人間は事物の記号↑訳者注↓(言語)に対して厳密に同じ概念をもたすために、たがいに没頭するのではなく、その感覚的な表象と、その内的な概念生産という鎖の同じ分枝によってたがいにふれ合い、こうしてたがいに対応するが、しかし同じ概念を生み出さないような制約と、そのような種々雑多の中のみ、ともに同じ言語の上に結合するのである」⁽⁵⁾と。こう解するとき、人間と人間との中間にあって相互の理解をもたすべき真の言語の機能は、決して両者の間の表面的な概念の一致などにあるのではなく、もっぱら人間性の共通の本性から生じる個々の感覚を、結合することにあるといえるのである。またこのことからして、こうした言語を通じて理解の可能性をもたす根拠

は、個性の中にあつて個性に与えられている一般的な人間の本性であり、逆にいえば、個性が言語の働きによって、共通の人間性の本質一般へと参加し、これによって、いうところの相互理解が可能となるのである。

しかし個性が言語の働きによって人間の持つ共通的な本性に参加するとは、どういうことをいうのか。われわれはこのことをさらに詳細に展開してみよう。前述のように厳密に言えば、もとより一人の人間の個性的な表明は、それを聴く者にとっては、彼が話した者と再び同じものを生み出すことは可能ではない。ただその場合彼は、彼の持つ人間本性の一般性によって、類比的 *analogisch* に他者の表明を把握しうるだけである。したがって誰でも他者が想い語ることを厳密には理解しえないがしかし、他者が想い語ることに対応するところの何かは理解しえられるものである。この間の経過を言語についていえば、語る者の言語は、聴く者にとってどのように翻訳されるかということに依存するわけである。その際、聴く者は語られることを、自己のもつとも個性化した極へと持ち運ぶのではなく、むしろそれを、自己の持つ人間本性の一般性へとひきもどし、自己の個性的な色彩を捨て去るところに、よりよき理解が達成されるのであり、いわば理解は脱個性化の経過の中にあるといえるのである。しかしこうした経過をたどつてもなお究極的には、理解し難い残余がありつづけることは止むをえざるところであり、フンボルトもまたそうした残余については、むしろそれに積極的な意義を認めているのである。彼はいう「理解とは、決して分ち難い一点における理解の仕方の出逢いではなく、むしろそこからしてより一般的な部分があらわれるところの思想や領域の出逢いである。これによって人類の精神的進歩は可能となる」と⁽⁶⁾。こうした彼の見解の中には、人間の持つ脱个性的な理解の様式とともに、逆にまた個性的な理解の様式||ここでいう理解の残余||がみられるのであり、このような両側面をもつ理解の様式の中に、彼はまさに相互理解のもつ創造的な意義を認めていたことが洞察されるのである。

言語による意志表明についてのわたしの考察は、語る者と聴く者との間における相互理解の意義へと発展した。この場合なおつきに、会話と社交性という二つの項目が、付随的に述べられるであろう。まづはじめに理解にとっての基本的言語形式としての会話とは、いったいどんな形式をとるものであろうか。そこではまづ、聴く者の理解は、それが語る者を認めるかぎり、答えるための前提となる。つぎに理解して答えるということは、汝の言葉に対応して私の言葉が発せられることである。この私の言葉と汝の言葉との成功的な交互作用が会話であり、これによって相互の理解は、ますます深まるのである。会話において理解される汝は私のパートナーであり、理解される私は汝のパートナーである。我と汝とは、ともに相互のパートナーとして批判もなし賛同もなすのである。このようにして会話はたんに両者が並立するだけにとどまらず、一つの真理に向って、個性の表明であるそれぞれの言語を通じて進み行くのであり、これによって「概念は異質的な思考力からの反射によって、はじめてその確実性と明晰性とを獲得するのである」⁽⁷⁾。したがって会話は、個々の認識がつねにより近く接近し、ときにはそれらが一致にまでもたらされるところの前進的な調和であると規定されるであろう。しかし会話における個人的展望のこのような相互接近過程は無限である。それはちょうど、われわれ全人間の生が、相互の一致をめざす緊張的な会話として、無限の過程をすすみゆくと同様である。にもかかわらず絶えずこうした相互の一致をもたらそうとする原動力となるものは会話である。ここにわれわれは会話のもつ大きな意義を認めるのであり、フンボルトもまた、こうした会話の意義を認めることからして、その奥にひそむ人間の持つ社交性 *Geselligkeit* を重視したのである。

社交性は、言語形成のための、同時に人間存在のための一つの条件である。われわれが人間を思索的存在と規定するならば、前述の経過から直ちに他者を措定することの妥当性は認められるはずであり、その際必然的に、社交性は

相互の思索のための根元的な条件であることが了解されるのである。社交的な伝達は、「人間に確信と鼓舞とを与えるものであり、人間の思考力は、何か自己と同じきものを必要とし、また逆に自己と異ったものを必要とする。同じきものによって、思考は燃えたたせられ、異なるものによって思考は、自己の内的創造の本質にとっての試金石を受け取るのである⁽⁸⁾」。こうしてまた人間は、フンボルトもいうごとく、「その本性上、無条件に社交性を示す⁽⁹⁾」ものである。人間の中に自然にそなわるこの社交性こそが、一つには人間のもつ諸能力もをばら調和的に発展させる力となり、いま一つには、その存在によって何かある全体的で調和的なものが人類の中にあることをわれわれに暗示するのである。そうしてわれわれは、この全体的で調和的なものによって、完全性への要求を他者を通じて、自己の中へと運び入れねばならぬ使命を有するのである。

社交的な本質を所有するという人間の解釈でもってフンボルトは、それまでもつばら彼が維持していたところの、自己自身の中に閉鎖し自足する個性への見解を乗り越えたのであった。彼はいう「自我は人間の存在にとって構成的な意義をもつところの汝への依存からして規定せられる⁽¹⁰⁾」と。人間はいまやフンボルトにとって、言語を伝達する汝という経験によってはじめて真の人間となるのである。人間が他者とのかわりによって理解に達する様式は、多種多様であるが、それらの様式に共通する根元的なるものは、言語による理解を通じて自己を自覚することである。ところでこのように言語によって規定される人間性には、さし当っていかなる倫理的な要求も包含されず、それはむしろ最初は単純な人間学的事実であり、しかもこの人間学的事実は、必然的に同時に言語を伴う複数人間的な現実として出現するものである。しかしこのような単純な現実もまた、つぎにそれが言語によって左右される人間社会の中の複雑な関係となるに及んで、一つの倫理的な要請を包含することとなるのである。それは端的に言って、他者の言

葉に真面目に耳を傾けるといふことである。この点でフンボルトの場合、そうした倫理的要請は、あらかじめ予感はされているが、後期の叙述においても明瞭にはあらわれていない。察するにフンボルトの個性解釈はこの点でなお、他者よりは自我に傾斜し、他者は自我を補足する意味において存在すると解されていたためであろう。なお付記すれば、この問題はむしろ現代の哲学的人間学的論争において、たとえばカール・レーヴィト⁽¹¹⁾によって、あるいは教育哲学的立場から、オット・フリードリッヒ・ボルノウ⁽¹²⁾によって論じられているが、いづれもそこでは、つねに語る者と聴く者による寛容と協調の精神が強く主張されているのである。

右にわたしは、自らの中にとちこもる個性が、フンボルトの初期人間学研究の時代から、いかにしてその自立性を失い、本質的にはただ複数の共同人間からのみ理解されるかを述べてきた。しかもこのような共同人間なしには、個性は語る個性として一般には存在しえないのである。そうしてそのキーポイントとなったものは言語であった。言語こそが、より正確には言語を語る人間の能力こそが、それぞれの孤立性と完結性の中に閉じこもりうとする我と汝を解き放ち、我は汝によって我となり、汝は我によって汝となりうるのである。しかもこの事を可能ならしめるものは、根元的に人間が共通して所有するところの人間の本性であった。こうしてフンボルトは、彼の自立的で個別的な人間解釈の道を、言語を通じてその対立者に依存する存在としての人間解釈にまで進んでいったのである。彼の言語哲学から生れたこうした人間解釈は、当然にまた、彼の初期の人間陶冶の理論にも大きな影響を与え、後にシュプラーンガーのいういわゆる普遍性 *Universalität* へと大きく変革する一因になったのである。しかしここではなおつぎに、そうした陶冶論に触れるまえに、それに大きな基盤を与えると考えられる言語社会についての考察が必要である。

- 註 (1) W. Dilthey, *Gesammelte Schriften*, VII, S. 87ff, u. S. 320ff.
 (2) W. v. Humboldt, *Gesammelte Schriften*, VII, S. 64. Übernommen aus V, S. 396.
 (3) G. Simmel, *Lebensanschauung*, 1918, S. 16.
 (4) W. v. Humboldt, *Gesammelte Schriften*, VII, 1, S. 37.
 (5) dito, VII, 1, S. 169f.
 (6) dito, V, S. 418f.
 (7) dito, V, S. 380. Vgl. auch VI, 1, S. 26f.
 (8) dito, VI, 1, S. 173.
 (9) dito, V, S. 380.
 (10) dito, V, S. 29. Humboldt verwendet diesen Begriff wiederholt ausdrücklich; so wenn er z. B. von der "Abhängigkeit des Menschen von andrem menschlichen Daseyn," (V29) spricht.
 (11) K. Löwith, *Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen*. München 1928, S. 113.
 (12) O. F. Bollnow, *Sprache und Erziehung*, Stuttgart 1966, z. B. S. 52ff.

人間がそこで思考し感じ行動するところの社会は、言語によって結ばれたところの言語社会である。社会は言語によってはじめてその形成が可能となるのであり、言語によって結合されないとところの社会は、厳密な意味で社会とはいわれないであろう。ところでこのような言語社会が、いかなるものであるかを明らかにするためには、さし当ってフンボルトが考えていた国民 Volk と民族 Nation との概念の異同を取り上げねばならないであろう。というのは

後述するように言語社会がこの両者と密接な関連の上に立っていて、両者の異同を明確にすることによって、言語社会のもつ性格がしだいに明瞭となるからである。

自然法についてのクラインの講義に依拠して若きフンボルトは、国民と民族とをまづつぎのように区別するのである。「国民とはある国家 *Staat* に所属しているものをいい、民族とはすべて同種の血統・言語及び風習を持つものをいうのである」⁽¹⁾と。この区別は明瞭である。若きフンボルトにとって、前者はただ国家という概念との結びつきにおいてのみ考えられるものであり、後者はそのような国家とは無関係に存在するものである。彼にとって国家とは「統合された社会」⁽²⁾を意味し、国民とはそのような社会の成員をいうのである。これに対して民族とは、たとえ任意であるにもせよ、国家の枠の中には組入れられないものであり、それはその出生・血縁の成員を包含し、同じ風俗習慣を持ち、一つの言語を語り、それらを基盤とする一つの統一体をいうのである。つまり国民とは国家に結びつく人為的なものであり、民族とは国家に結びつかない自然発生的なものである。ついにながら付記すれば、この当時のフンボルトにとって国家とは、個人の人間形成のための前提条件を満たすところの施設以外の何ものでもなかったのである。⁽³⁾

フンボルトがその初期に抱いていた国民と民族とに関する大要右のごとき見解の明確性は、しかし彼のその後の体験と思索とによって漸次稀薄となってきた。たとえば、彼の一七九九年の第二回パリ滞在中の日記によれば、右の見解を、ドイツ人の場合とフランス人の場合という二つの判断に分け、それぞれのニュアンスの相違をほめかしているのである。彼はいう「ドイツ人は国民としては、あれやこれやの事をなしたとして語ることは何もない。しかし民族としては、驚くべきことを、あれやこれやと排他的に、そして一人でなすことが可能である」⁽⁴⁾と。おそらくフンボ

ルトは、彼の時代の政治的な不統一をこのような言葉でもって、あてこすったのであろうが、そこではドイツ人はさし当って国民としての国家的政治的結合という観点のもとでは、自らを理解できないのであり、それはむしろ、すべてのドイツ人を国境の外側までも包含するところの民族として理解可能なのである。こういう理解に対して、彼はフランス人の場合をつぎのように語るのである。「フランス人が民族としてはゼロであり、国民としては強く、そして進歩的であったといえ、フランスに不快な誤解をもたらすであらう」と。不快な誤解をもたらすとは、つまりフランス人の場合には、前述のような彼の見解が適切でないことを、彼自身ひそかに認めていたことの告白であらう。

さらに一八〇四年六月二十一日のイエンス・バーゲッセン宛の書簡においては、国民を教養ある者たちと比較して「それはいかなる共通の性格をも所有しない人間のグループを意味するのである」と述べ、ヘルダー・ゲーテ・カントなどの場合にみられる伝統的な国民の規定にしがっている。しかしその際、彼はこの国民をただ何か否定的な低級なグループとみるのではなく、むしろそれは教養ある者に到る前の存在であり、未来に多くの可能性を有し、彼らに形式を与えるならば、かならずや大きな仕事をなすであらうと解している。この点では国民はすでにさきに述べた民族の性格により近く接近しているように思われるのである。さらに後期になるにしがって、彼の国民と民族との見解には、さほどの大きな相異はみられなくなり、ときには両者を同義的に用いる場合もみられるのである。しかしフンボルトが「言語は、つねに民族と国民をしてそれが本質的にあるところのものを定める特徴である」と語るごとく、究極的に彼が意味するところの真意は、けっきょく民族は主として言語に、国民は住居と共同生活に、なおまた国家は市民制度にかかわるものであったことが洞察されるのである。

それゆえに言語社会の持つ性格と意義とをより詳細に規定せんがためには、われわれは民族と、より正確には国民や

国家をささえるところの民族と言語との関係を論じねばならないであろう。ところで人間存在と言語とがたがいに制約せられるように、民族と言語もまた相互に依存関係の中に立つとみられるのである。このことについてたとえばフンボルトは「言語は個人におけると同様、民族におけるすべてのものとも密接な関係にある。それは知的な方向の無限の多様性から出て民族を規定し、またその内的な自己活動によって、自己へと及ぼす外的な働きかけのあらゆるものを変容するのである」と語っている⁽⁸⁾。ここでは言語が民族を規定する面をとりあげているが、一方また彼が、民族の中には、個性から他の個性へと単独に移行することの不可能な精神的創造物を産出する力が存在すると語るとき、その創造物とは一つの民族や国民の形象を内包するところの言語を意味するのであり、この点では逆に民族が言語を規定することを物語っているのである。このようにしてあらゆる言語は、ただこの個人の言語だけではなく、むしろつねに同時に、民族の作品としての民族言語でもあるわけである。なるほど言語は必然的に個人とともに措定せられるが、この個人は民族との結びつきにおいてのみ存在し、民族の言語によって成長したのであるから、個人の言語は、またまったくその個人の属する民族言語の中においてのみ成長しうるのである。

さらにこうした関係は、たんに個人の言語と民族の言語のみにかぎらず、民族性や民族的な思考方法もまた深く、その民族の言語とかわりを持つものである。人は言語を思考することによって語り、また逆にそれを語ることによって思考するのであるから、そうした個人の集合によって形成されている民族の言語から、一定の世界観や人生観が生じるのは当然のことであろう。そこで、その民族が使用するあらゆる言語から、その民族性を推論することも可能である。一方個人はまたこのような民族性によって制約されつつ言語的に形成されゆくものでもある。この点で、言語が民族性の根拠であるか、あるいは民族性が言語の根拠であるかは、ただちに決定しがたい問題であろう。フンボ

ルトもまたこれに関しては最後まで、決定的な見解には達しなかったようである。しかしどちらかといえば、彼は言語がより強く民族性を刻印づける方に傾いていた⁽¹⁰⁾ようであり、したがってまた前述の民族の概念は、強く言語によって基礎づけられるといっているのである。

民族とは、一定の様式で言語的に形成された人間の集合体をいうのであり、このことはけっきょく民族がつぎにいうような言語社会であることを意味するものである。すなわちそれは、個人を規定する民族言語や、それにかかわる精神的形象の内部でのみ、人間が共同的な相互存在として可能であるような社会である。さらにこうした言語社会は、人間をたんに社会的に規定するばかりでなく、また歴史的にも規定するといわねばならないであろう。なぜなら言語社会を構成する民族言語は、いわばそれぞれの世代の思索と感情とを包含し、それでもって現代の人間の、たとえば社会認識の仕方に影響を及ぼすところの言語であり、いうまでもなく突如として生じたものではないのである。それはちょうど人間にとって、はるかなる過去がなおよく現在の感情に結びつくように、先立つ世代のもろもろの息吹きでありながら、われわれの身近く存在するものである。そこでこうした言語社会に生存する人間は、さし当っては自立的であり、さらには彼と生をとにもする現在の社会へと組入れられてはいる。だがしかし、彼はつねに歴史的な力としての右の言語に、すなわちそれによってもろもろの世代がつくられ、それらの世代の思索と感情とをその中に含むところの民族言語によって育成され、規定されつつあるのである。

註 (1) W. v. Humboldt, Gesammelte Schriften, VII, 2, S. 501.

(2) ebd.

(3) Humboldt hat schon diese Auffassung in seinem anfangenden Werk "Ideen zu einem Versuch, die Grenzen der

Wirksamkeit des Staats zu bestimmen, (1792) bis in die Einzelheiten erklärt.

- (4) W. v. Humboldt, Gesammelte Schriften, XV, S. 44.
- (5) ebd.
- (6) A. Leitzmann, Jugendbriefe Wilhelm von Humboldts. 1935. S. 22f. Siehe auch W. Siegler, Die Völkercharakterologie Wilhelm von Humboldts. Tübingen 1952, S. 59.
- (7) W. v. Humboldt, Gesammelte Schriften, VI, 1, S. 189.
- (8) dito, VII, 1, S. 40.
- (9) dito, VII, 1, S. 38.
- (10) dito, VII, 1, S. 171.

三

民族の決定的な徴表は言語であり、各民族の言語は、それぞれの民族性や、それから生れるところの精神的形象を表現するものである。そこでこのような民族性や精神的形象によって自己を形成しようとする個性は、まづもってそこに生きるころの言語を、自己のものにしなければならぬであろう。言語こそが個性のなかで、人間の普遍性に接近しようとするわれわれをまづもって助成するものである。ところで民族言語による個性の育成は、一方でともすれば、他民族との分難に導くかのように思われ、したがってフンボルトが育成の最後の目標とした、いわゆる全体性 Totalität から遠ざかるかのように考えられるのである。しかしフンボルトもいうように、「高く教養ある民族相互の働きかけによって、はじめて民族相互の知性の完全なる発展」⁽¹⁾が期待されるのであり、これを可能にするものは、や

はりそれぞれの民族言語によって育成された個性でなければならぬであろう。言語は一方でこのように個性と民族、民族と民族との相互依存の関係を形成するとともに、他方でまた、個人や民族の独自性を育成するのに大きな役割を演じるものである。そうしてこの両側面への活動こそが言語の本来的使命であるというるであろう。

言語の偉大な功績をフンボルトはつぎのように語るのである。「言語は民族を導く、しかしまた制約的に民族にまとわりつく……。言語は人間のもっとも低い目的や安らぎに奉仕する、しかしまたひとりですべてを、高きものへとつれていく……。言語はもろもろの個性の相異性を融和し、伝説と書物によって、ふたたびもたらされぬ消えゆくものとどめる……」⁽²⁾と。フンボルトをして、民族性をその個性によって、無数の個性化された集積によって、とらえさせようとした試みは、前述のような言語見解をもつ彼に、確固たる一つの洞察を得させたのである。それは右のような性格をもつ言語は、人間育成の問題から絶対に分離することはできないという洞察であった。パリ滞在後の彼の言語研究は、つねにこのような洞察から出発し、人間育成への問題へと進行したのである。したがって彼の言語研究は、この小論の内容である言語と個性、言語と社会のつぎに、言語と陶冶の問題を論究してはじめて、総括的に解明しうると思われるのである。しかしそれはなに分、詳細な分析を必要とする課題であるから、つぎの機会に稿をあらためて述べることとなるであろう。

註(1) W. v. Humboldt, Gesammelte Schriften, VI, 1, S. 124. Vgl. auch VI, 1, S. 193.

(2) ebd.